

平成 18 年度

宜野湾市海外留学生派遣事業

留学報告書

池宮城 香

はじめに

「宜野湾市と中国の廈門市が友好都市だなんてすごい。」

市報を読んでいたときのことです。ふと、ある記事が目にとまりました。

「廈門市への留学生募集。満18歳以上、満40歳以下で高校卒業以上の学歴を有し、宜野湾市に居住する心身ともに健康な者…。私でもチャレンジできるのかな。」

興味がわきすぐにハサミで記事を切り取ったものの、それを目の前にして、応募しようかどうしようか1週間悩みました。最も心配だったのは中国語を全く学んだことがなかった点です。しかし長い歴史や文化、雄大な自然を持つ中国へのあこがれと、そこで暮らす人々への関心、歌を歌っているかのように響く中国語の美しさが頭から離れず、留学への気持ちは高まるばかりでした。私は不安よりも、今まで密かに抱いていた中国への思いの方がはるかに強いことに気がつきました。

「よし、とにかく応募してみよう。」

それが私自身を大きく変えるきっかけになりました。

廈門に来たばかりの頃は相手が何を話しているのかまったく分からず、慣れない言葉や生活に緊張していたこともあり、気持ちの焦りから不安になることもありました。しかし、周りの先生方や友達に支えられ、自分のペースで頑張れば良いと思うようになってからは積極的に楽しむことができるようになりました。

この1年間、私が学んだことは中国語だけではありませんでした。学習を通して中国の文化や習慣を深く学び、生活していく中での出会いを通じて人間としての生き方について考えさせられました。また、宜野湾市の職員の方々をはじめ、前の留学生の先輩方、家族や友達からの励ましと応援にどんなに勇気付けられたことでしょうか。たくさんの人々の助けがあって生きているのだと改めて実感しました。

輝きに満ちたかけがえのない1年と、ゆるぎない自信を私に与えて下さった宜野湾市、廈門市の皆様方に心より感謝申し上げます。

この有意義な交流が、両国の絆をさらに深めるものとなり続けますように。

5人目の海外留学生として、宜野湾市から廈門市へ派遣された2006年9月から2007年8月までの1年間に私の体験したこと、感じたことについてご報告いたします。

厦門について

厦門は台湾のちょうど左側に位置し、沖縄から近いこともあり気候も大変よく似ています。古くから貿易港として栄えていましたが、最近では経済特区としてめざましい発展をとげており、たくさん的高層ビルが立ち並ぶ近代的な都市です。

その一方で古い町並みも大切に残されていて、美しい花々や緑があふれるその姿は「海上の花園」と呼ばれているそうです。特に厦門市の市花がブーゲンビリアということもあり、街のいたるところで色とりどりのブーゲンビリアが咲き誇る様子は、青い空の美しさも手伝って本当にきれいでした。また、沖縄でも馴染み深いガジュマルなどの植物が多いせいか、初めの頃は中国に来たという気がせず不思議な感じがしたのを覚えています。

観光地として人気があるコロンス島には西洋風の建物が多く、時を忘れてしまうほど美しい景色が残っています。

学校生活

厦門理工学院はにぎやかな市街地から少しだけ離れた場所にあります。周囲には他にも大学があり、学生の街といった感じです。私の寮は校内にあるのでとても快適に過ごすことができました。

授業は中国語の会話、文法、リスニングのほかにも中国の伝統文化の時間もあり、5人の先生が教えて下さいました。留学生は2人だけなので、先生1人に対し生徒が2人というすばらしい環境の中で中国語を学ぶことができました。先生方には手料理をごちそうになったり、一緒に日本料理を作ったりして、授業以外でもとても良くしていただきました。

学生はとても勉強熱心で、教室には毎日遅くまで明かりがともっていました。私が学んだのは旧校舎でしたが、バスで1時間ほどの所には新校舎があります。学生は新校舎で生活しているので平日には会えませんが、休日には一緒に勉強したり、散歩をしたり、家に遊びに行ったこともありました。

学生との交流で最も思い出に残っていることは、日本人の先生と協力して、日本の料理を作って学生を何度か招待したことです。私が作った料理の中でも特に失敗したのが「肉じゃが」でしたが、学生達はおいしいと喜んで食べてくれました。食事のあとで茶道も披露して、実際に学生にもお茶を振舞ったのですが、とても楽しんでもらえてうれしかったです。

印象深い2つの中国語

厦門で過ごした1年の間、私にとって思い出深い中国語が2つあります。

1つ目は「听不懂。」です。これは私が初めて聞き取ることができた言葉です。授業で習ったばかりの文を覚えて、勇気を出してお店の人に話しかけてみたら「听不懂。」と一言返ってきました。まったく意味は分からなかったのですが、音の響きが面白いのと話しかけることができたうれしさで、何度も口ずさみながら音を頼りに辞書を調べました。すると「あなたの言っていることが分かりません。」という意味だと知って、恥ずかしくて何だか笑ってしまいました。ただその時に感じたのは、恥ずかしさ以上に伝えることの喜びでした。それがきっかけでお店やバスの中などで話しかけることができました。

2つ目は「一边喝酒,一边学习,进步很快。」です。

厦門理工学院には中国語を教えて下さる先生方以外にも、留学生の生活をサポートして下さる事務室の先生方がいます。中国語のできない私にとって、とても心強い存在でした。その中でも、特にお世話になったのが陳先生です。陳先生は日本語が堪能で、優しくて気さくな先生です。休日には食事に連れて行って下さるなど、留学生が安心して過ごせるよういつも気を配って下さいました。

その陳先生に長崎県の佐世保市からの申し入れがあり、佐世保市への派遣が決まったときのことです。「日本語のレベルを上げたいので、一緒に教え合いながら勉強しよう。」と先生から連絡がありました。私にとっては願ってもない機会なので、教科書をたくさん抱えて事務室に向かいました。すると先生は「まず食事をしましょう。」と歩き出しました。注文を終えた先生は大好きなビールを手に、ニコニコして「一边喝酒,一边学习,进步很快。」とおっしゃったのです。それは「お酒を飲みながら勉強すると上達が早い。」という意味で、陳先生の持論だそうです。私は先生らしいなあと思い、笑いながら先生の言葉をメモしました。そのあとはコップを片手に、日本語と中国語を交えながらお互いの国の文化や習慣について楽しく話しました。

振り返ってみると不思議なことに、乾杯からはじまる勉強会で陳先生が教えて下さったことは今でも忘れることがありません。

もしかすると先生は「本当の意味で言語を身につけたいなら、勉強に集中しすぎて相手を知ることをおろそかにしてはいけない。実際に人と人が向き合うことでお互いについての理解は深まる。そうして相手を認めることは、母国語以外の言語を学ぶ上で最も大事なことだ。」と教えたかったのかもしれない。真っ赤な顔でうれしそうに話していた陳先生を懐かしく思い出しては、はっとさせられるのです。

ホームステイ

日本語科の主任である魏先生の提案で、農村に住む学生の家で3日間ホームステイに行くことになりました。私を快く受け入れてくれた2年生の蔡惠妮さんの家は厦門市内からバスで2時間、さらに乗り換えて1時間、バイクで15分という、山に囲まれた同安という静かな場所にあります。都会である厦門市内とは違い、空気がとてもきれいでした。

惠妮さんは優しく明るい性格なので、私達はすぐに打ち解け合い、まるで昔からの古い友人のような気がしたほどです。彼女は日本語を、私は中国語を学び始めたばかりでしたが、分からないときは辞書を調べながら会話を楽しみました。

彼女の家族の方々もとても親切で、私を家族のように迎え入れてくれました。その心遣いのおかげで、はじめの緊張が嘘のように私はリラックスして過ごすことができました。同安を第2の故郷のように感じ、帰りたくなるほどでした。

朝は太陽の光と鳥の声で自然に目が覚めました。すぐに身支度を整えて、みんなでお茶を飲んだあと食事の支度に取りかかります。食事を作るときは畑に野菜をとりに行きます。惠妮さんの家では野菜以外にも、米やたけのこ、落花生なども栽培していて、肉や魚以外はほぼ自給自足だそうです。離れにある台所にはかまどがあり、つい最近まで使っていたそうです。新鮮な食材を使った食事はとてもおいしかったです。それ以外にも、おばあさんがとったばかりの蜂蜜に、お湯を注いで飲ませてくれた味は今でも忘れられません。

惠妮さんは私が今まで知らなかったことをたくさん教えてくれました。散歩の途中で畑で取った落花生をそのまま生で食べたり、初めてのことばかりで何もかもが新鮮でした。家に持ち帰った落花生は中のピーナツを取り出して、にんにくと一緒にかまどの火で炒って食べたのですが、香ばしくておいしかったです。

夜は停電したので村中が闇につつまれました。ろうそくの火が家々にともり、空にはたくさんの星が輝いている様子は、現実とは思えず夢のように幻想的でした。月明かりのもとでする惠妮さんとのおしゃべりは、話しても話しても尽きることはありませんでした。

沖縄に戻ってきてからも、月を眺めるたびに、同安の夜と惠妮さんのことを思い出します。同安での3日間は私にとって一生の思い出になりました。

旅行など

厦門での滞在中に友達や先生方と旅行に行く機会にも恵まれました。その中でもいろいろな意味で特に思い出深い旅といえば、迷わず、中国の正月である春節に事務室の先生方と湖南省へ行った時のことでしょう。

湖南省には世界遺産である張家界とよばれる山々があり、観光に行く人がとても多い場所です。私達が行ったときも、たくさんの人が張家界を訪れていました。

まず飛行機に乗って湖南省の省都「長沙」に到着したあと、さらにバスで2時間ほど移動して張家界を目指しました。私は初めて福建省以外の場所に来たという喜びで、幸せのあまりわくわくしていました。厦門とはまったく違う、凍えるように寒い気温と見慣れない景色に、楽しい旅の始まりの予感がしました。夜はお正月なので爆竹と花火を楽しみました。花火といっても打ち上げ花火でした。普通の人でも打ち上げ花火を上げられるなんて、さすが中国、スケールが違うなあと思いました。

翌朝、目が覚めるとすぐに朝食をとりました。そして、3泊4日のひたすら山に登り続けるという修行のような旅がスタートしました。どこまでも続く中国の雄大で美しい自然に圧倒されながらも、あまりの寒さと空気の薄さで早くも頭がボーッとしてきました。想像以上の本格的な山登りに、登り始めて4時間目には来たことを後悔し始め、5時間目にはいい大人だというのに泣きかけました。6時間目にはつらさのあまりヒゲが生えそうになり、そして限界かと思われた7時間後、やっと山頂にある宿にたどり着きました。思わず歓声が上がりました。

部屋に入ると中は外よりも寒くて、冷凍庫のように冷え切っていました。まさかとは思いましたが暖房が壊れていたのです。たぶん気温は-5℃ぐらいだったと思います。じっとしていると寒いので、ウロウロ歩き回らずにはいられないみんなの様子を見て、陳先生の提案で「白酒」を飲んで暖をとることになりました。初めて飲んだ中国のお酒「白酒」は、香りが良くてとてもおいしかったです。なんだか本当に体が暖まってきたように錯覚もおぼえてきたのか、心なしかみんなも元気になった様子でした。すると食事が運ばれてきました。ついさっきまで庭にいた鶏が中心の家庭料理でした。素朴ですが体が温まり、この世のものとは思えないぐらいおいしかったです。

夜になると気温がさらに下がりました。もう何度かもよく分からないほどです。しかし暖房は壊れたままなので、就寝の時間になっても寝付けませんでした。布団が氷のように冷たいなんて初めての経験でした。布団に体温を奪われるとは一生の不覚です。雪山のシーンがよぎり、このまま眠ってしまっただ大丈夫なのかと一瞬思いましたが、疲れには勝てず寝ることにしました。

そのように4日間過ごしたことで絆が深まったのか、旅行をきっかけに、事務室の先生方やその家族のみなさんとはとても仲良くなれました。

出発する前は私だけが日本人だったこともあり、言葉の面で不安でしたが、過酷な山登りと寒さの前ではそんなことは小さな問題だと身をもって知ることができました。こんなに思い出深く楽しい旅行は、あとにも先にもこれっきりだと思います。